

弘法大師こと空海は、密教の宗祖であり、山形県内地元に係っては湯殿山、そして、旧本道寺（現一口之宮湯殿山神社）の開祖である。地元の皆が特に敬愛して止まない空海は、青年期二十四歳の思索「三教指帰」を出発点として、その後多数の著作を遺し、晩年五十七歳にして「秘蔵宝鑰」で帰着したと云われている。加藤純隆・加藤精一の著書を参考に後者のものから図(表)－1に抜粋して見る。

「秘蔵宝鑰」51頁・196頁より。

[原文・読み下し] 有・空、すなわち法界なりと観ずれば、すなわち中道正観を得。此の中道正観に由るが故に、早く涅槃を得。

[意識] 一面においては現世のものは仮の有であり、同時に他の一面においては空であり、これがそのまま法界（宇宙）の相である、と観察・思索すれば、そこに縁起による中道の正しい見方が生ずるのだ。この中道の正観に由るから速やかに涅槃（安らかな境地）に到達出来るのだ。

（解説）片寄った見方を離れて中正の道に付くことが釈尊依頼の仏教の中心的な旗印の一つである。仏教各宗の根本に流れている主張で、これは、ほどの良さなどという中庸の道ではなく、捉われを離れて厳しく公平に現実を見極め、正しい行動を取ることを意味する。

図(表)－1

私は、人間の日常生活は、お大師の教説を噛み締め、実践して行く「中道正観」行であると思う。中なき正は成らず、中道に従えばこそ正しきが見え、正なき中道は成らず、と解釈している。まずは『中』に焦点を当てつつ考察する。

1. 仏陀（お釈迦様）の教え

そもそも、空海といえども仏陀（釈尊）の教えを本にしている。中村元・田辺祥二著「ブッダの人と思想」（日本放送出版協会）を参考に図（表）－2に記述する。

ブッダは、常人に出来ないアクロバットな修行、不可思議な霊力を目指すオカルト的修行、心身を極端に苛(さいな)む苦行を奨励していない。普通人が生活を正常に保つならば到達出来る道であると説いた。

- ブッダは悟りを開いて最初に説法したことは、「中」（中道）と「正」（八正道）である。
- 片方の何かに片寄る・偏って断定することは、すなわち、自我に固執することである、我執にしがみ付けば真実・真理に到達出来ない。
- 中道の実践は片寄りを正すこと、両極の捉われ・拘りから離れること、片寄りを正すことは中道の実践である。

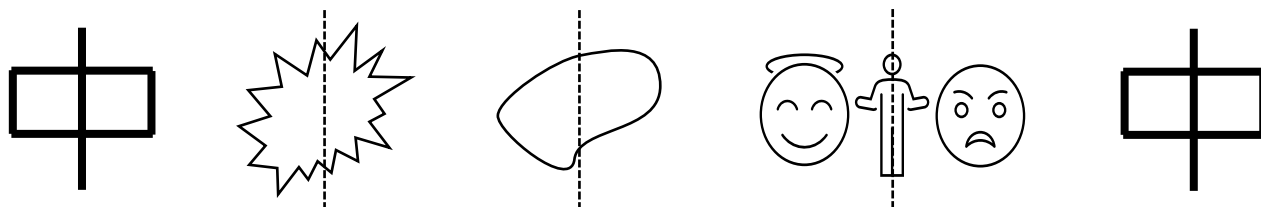
図（表）－2

2. 私の考える「中と正」に係る形象的な意味合い

(1) 『中』のこと／図(表)－3

私の自説、『中』の文字を次のように解釈している。

中の形象は縦棒が真ん中を貫いている。横四角は森羅万象の「もの・こと」の意味を込める。縦棒はその「もの・こと」の中心核を探り当てようとする意味を込める。見えるものに焦点を当てれば今のありのままの姿を変えずに同面積・同体積・同重量にする境界線探しを意味する。見えないことに焦点を当てれば、今のありのままの姿を変えずに同価値にする境界線探しを意味する。「もの・こと」を「その本体・本質は何？」と、どこまでも切り刻んで行く。逆の観方をする、その等割境界線は左右（上下）対極にあるものを接着している線（面）であり、もはや対極・対立・識別の性質を失った『合一』を意味付けることになる。「もの・こと」に色は付いていない、区別・分別の境界線がない世界が見えて来る。「無分別智・平等相」世界の妙を譬えるものとなる。

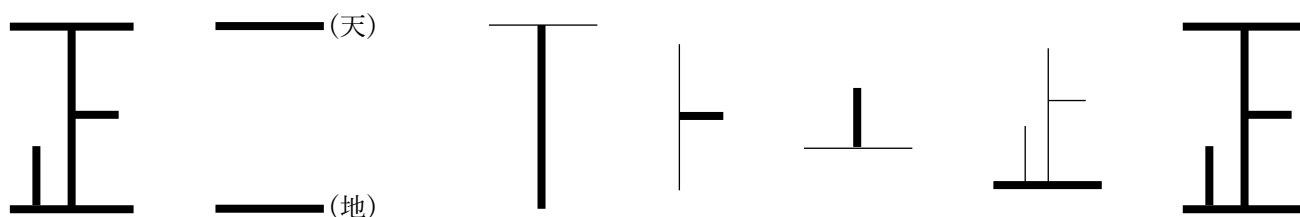


図(表)－3

(2) 『正』のこと／図(表)－4

私の自説、『正』の文字を次のように解釈している。

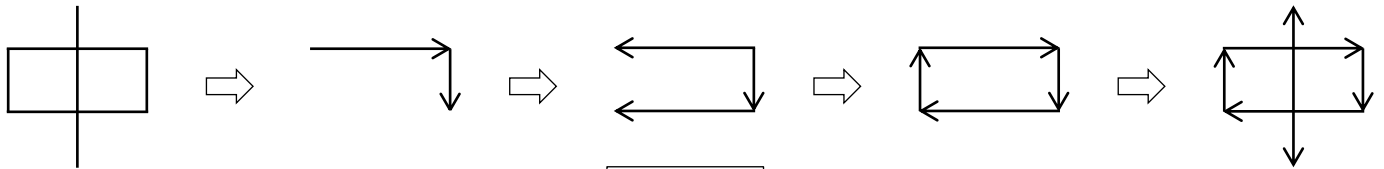
正の形象は縦横棒をあえて片止め交差させていることから上下端の横棒に天地の意味を込める。真ん中の縦棒は天地を結ぶ意味を込める。短い横棒は縦に対する横、つまり、一方向に対する別の観方の芽生えを意味する。次の短い縦棒は横に対する縦、つまり、別の一方向に対する別の観方の芽生えを意味する。「もの・こと」を「その本体・本質は何？」と、どこまでも、横→縦→横→縦→・・・、肯定→否定→肯定→否定→・・・、正→反→正→反・・・、つまり、縦横交差、多様・重層的な視点を訓える。陰陽二元相対(待)原理に従う日常社会の状況を指す。「分別知・差別相」世界の妙を譬えるものとなる。



図(表)－4

(3) もう一度「中」の構造

「中」の文字構造を再認識すると図(表)－5のとおりで、左極から右極、上極から下極、右極から左極、下極から上極へ、最後に中央において、それらを統合する意味合いで上下に貫通し収めている。したがって、「中」には「正」の根源的意味合いを含んでいるとも解釈出来る。上下の横棒は「天地」、繋ぐ縦棒は「人」を意味し、合わせて「天地人三才」の意味と重なっているとも解釈している。



図－5

3. 「中・正、正・中」真の調和（バランス）の可視化

筆順はともかくとして、前記、「中と正」の文字は共に、共通して横棒と縦棒の交差によって構成している。



雄花

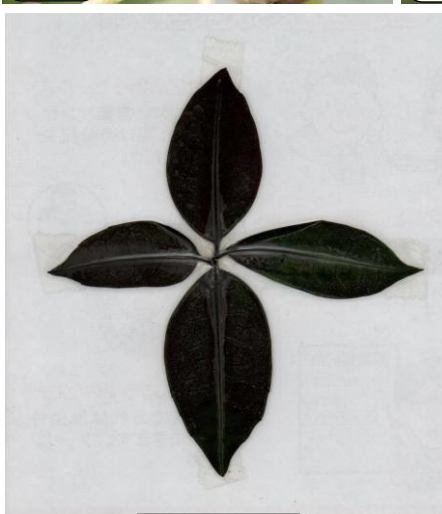


雌花



図－6 a

図－6 b



図(表)－6 c

(1) 十字対生のアオキ葉

定年退職後の61歳から始めた歴史街道・歴史古道スルーハイクおよび四国歩きへんろにおいて、図－6 aのとおりのアオキ葉を、図－6 cのとおりにラミネートにして背負ったことから、そのことを簡単に記述する。アオキ葉の最大の特徴「十字対生」は横ラインと縦ラインとの組み立て構成であり、前記「中・正」の構造と共通性を感じたからである、あるいはヒトリシズカ・フタリシズカ／図－6 bも十字対生は同様であるが、葉肉は余にも柔

らかくこれは採用しなかった。なお、アオキ葉を選択したその意図は記紀の日本神話に由来するが別記している。

(2) シーソー

さて、「俺は正義感が強く立派な人間だ」と自認するであろう御仁は、両極端な思想や心情は人間の精神を害するものと話され、自分は「中庸・真正」な人間だと公言するであろう。また、“「俺は信念が固い、あるいは、俺の信念は固い」、ぶれない、右顧左眄^{うこさべん}しない。”と胸を張るだろう。しかし、私は軽々しく使われる「信念」にはがんじがらめの守旧・頑固・堅物のイメージがある、そう言う人の大方は、視野が偏っている、偏頗・偏在していることを自覚出来ず、自分は左右の中心に常駐・常在しているのだと錯覚・思い込んでいる可能性大である。

本当の信念、飽くなき執念、あるいは、本質的な不動心とは、私は次のようにかく思う。空海が説く日々の中道正観行の中で獲得した、TPO、時・処・位に即応した最適解の「心・言・行」実践活動だと思う。TPO、時・処・位はまさにその字義のとおりであるから造化変成の世界である。様々な時・処・位に応じてぴしゃりと最適解を的中しそれを「立棒^{りゅうぼう}」(棒を立てる)する、その『立鋼志^{りっこうし}』(しなる鋼^{はがね}の強さの志を立てる)をその時・処・位に通貫^{かんちゅうきゅう}する、貫中久^{かんちゅうきゅう}する。

図-7のように、当人はG2位置(中心支持点・重心点、理想上の中央)に固定していると思い込んでいるかもしれないが、真実はG1の位置に固着しているのである。つまり、自らをG1の位置に史上最強の鎖で我が身を捕縛しているに等しいのだ。当然、本人は意識出来ない。強情な不動の信念などというものは、こびりついた煩悩・執着の一番幼稚・稚拙・浅薄な精神であろうと思う、なぜならば、我執と裏腹・一体だからである。

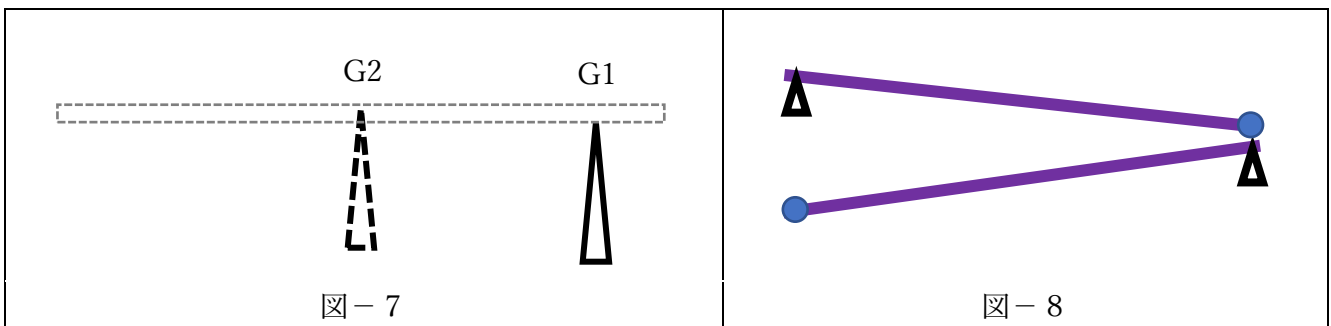
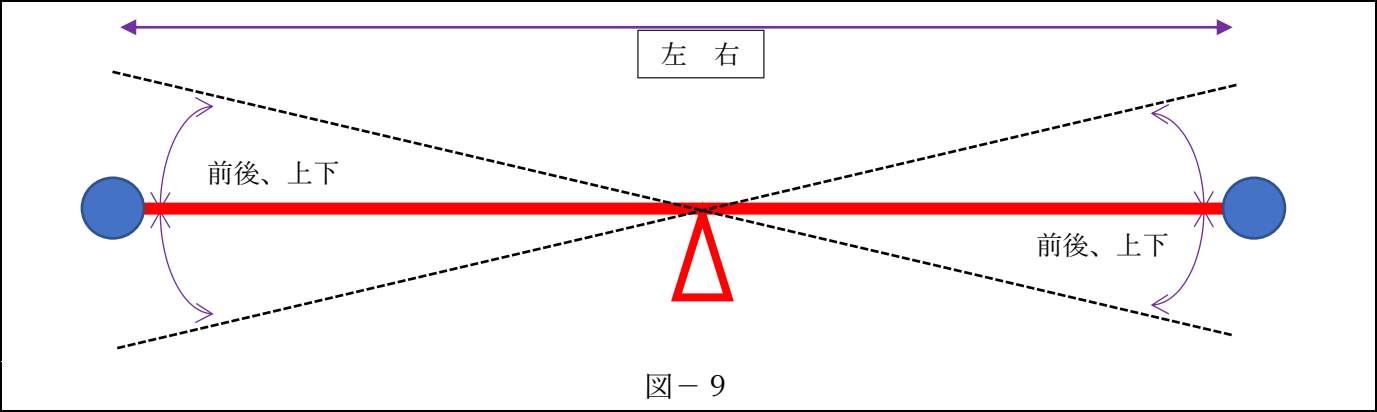


図-8を参照、真の「中」が真我である人は、どこまでも突き詰めた右端を、どこまでも突き詰めた左端を知った・分かった上で、つまり、左右の両極端・両極点・両無限端を普遍性・蓋然性を以って意識・理解し、思想化してこそ、初めて「中」の位置を「正」しく認識出来たと言える。両端を行ったり来たりする往復を際限なく繰り返す中で、そして、一つの「もの・こと」に対し、徹底的に「肯定→否定→肯定→否定→・・・、正→反→正→反→・・・」と真理を求めて追及した処で、中正の種子は自然と深層無意識層の「華厳界 ZPF」に畳み込まれ素粒子となって蓄蔵し、それがミトコンドリアのエネルギーとなり人間性に現れるのだ。

図-8を合成すると図-9のイメージになる。日常生活において、何事も、左極と右極を想像し、その両極を行ったり来たりする、すると連動して、見かけ上、前後、上下を振動することにもなる。極とは、それぞれの考え方、思想信条を抽象化・一般化したもの。また、「温故知新」の温を左極とすれば新は右極に、「不易流行」の不易を左極とすれば流行は右極に、「新旧重畳」の新を左極とすれば旧は右極に対応させる。もっと簡単に言えば、両極とは右翼と左翼のこと。心のシーソー乗り合い、あるいは

は、ピンポンラリーのイメージとなる。 とても意味深い・含蓄のある「中する」という言葉があり、中道正観の眼識を以って総合する、統合する、合一化するという意味である。

世の常は政治・経済、行政のあらゆる施策、何かを判断するにおいても、“要はバランスだ”と言うのがお決まりである、意図する意味合いは、るる記述して来た中での「中」の位置のことだが、そうならば、賛（正）・否（反）を並べ、賛成の世界を極めたか、真逆の否定の世界を極めたか、両面極点を極めたかということが問題だが、ほとんどは、ろくに深堀りもせず安直に自己限定内・チーム限定内で納めるものだから、世の中様々なほころびや不祥事が惹起するのだ。その中途半端を言い張るものから必ず対立を生むことになる。



「中道正観」の本質本体は、我々の現象界（三次元界）においては、
右の究極を知らずして中を得ず・左の究極を知らずして中を得ず、
上の究極を知らずして中を得ず・下の究極を知らずして中を得ず、
前の究極を知らずして中を得ず・後の究極を知らずして中を得ず
の訓えとなる。

結局は「中」は相対的で優劣・序列の状況から次第に統一的・総合的な合一へ進歩向上して行く働きを持つもの原動力・エンジンとなる。

4. 私に棲む右翼と左翼

インターネットより一部を拝借し、簡単にしたのが図(表)－10である。【Zigzag-memoNo015】に記述したとおりの私に棲む「^{ぶつまどうご}仏魔同居」と同相である。

私の考え方は、左翼と右翼の両面が混在しているのを自覚する。左とは右があつての左で、右とは左があつての右である。相対的比較関係における左右の分別であつて、左右というその位にあつて不動・絶対なものではない。

	政治的な意味合い	社会的な意味合い
左翼的	進歩主義、社会主義、共産主義、アナキズムなど	日本（の伝統や秩序）は古いとし、新しいやり方で、人権や自由や平等を大切にしよう！ 革新的で理想的
右翼的	保守主義、反動主義、国家主義、ファシズムなど	愛国心を持って、自分たちの日本（の伝統と秩序）をしっかりと守っていこう！ 安定的で現実的
図(表)－10		

「もの・こと」に一長一短有りて、左翼が右翼の言を、右翼が左翼の言を批判攻撃したところで、各々の主張の所詮は対象（相手方）の一部分を切り取り・切り出したもの「部分カット、断片、扇形 selector」であり、無駄な徒労に終わることは自明の理というもの。飛行機は両翼があつて安定するというもの、むしろ、左右の両極思想を両手に抱えることこそ人間の幅が広がる、器量が大きくなるというものであろう。他方、このように左右の分別を明確化するほど感情の振れが大きくなり、煩惱はいつまでもゆらゆら、中々収まらないことになり、自家撞着の精神疾患発症（うつ病）リスクが高まる人も出る、もしも本当にそうなったのならば、それは結果的に左右両極のいずれかに執着・固執・固着していることがただ一つの原因となる。だから、医薬品をいくら多量に飲んだ処で開放・治癒するものではない。

戻って、私は現実主義者と対比するならば理想主義者である。理想主義者＝社会主義者・共産主義者とは、もちろんイコールで結べないが、今でも風評的には≡の相を持つと思われる、また、生前の父は昭和20年9月に開拓部落に入植し農業を営んでいたが、持てる者と持たざる者の差別を指摘し、このままの情勢では益々その格差が広がると吾が足元に広がる資本主義のマイナス面（勝ち組と負け組の峻別趨勢）に反抗していたが、そばにいて精神的影響を受けたからであろう。

他方で、壮年の頃から敬慕・私淑する安岡正篤先生の本に親しみ、古賢先哲の書を読む中で、例えば武士道精神、国学に引き付けられた。こうなると保守派右翼思想と言われるかもしれない（私はもちろん戦争賛美者じゃない）が、だからと言って、長年の政権与党から腐れ切った詐欺師集団の自民党は糞食らえである。どこかの政治や宗教の集団に属している訳ではない。

と言いつつ、選挙権を得てからの棄権は1度はあったかもしれないが、その時の社会情勢踏まえ、時勢を見極めて、選挙について言えば、良心に従い一票を投じて来たが、選挙区・比例区、合わせては自民党から共産党まで投票して来た。1890(明治23)年10月30日に渙発された「教育勅語」や1945(昭和20)年8月15日天皇が読まれた「玉音放送（終戦の詔書）」に感銘を受けることや、心の私淑する師は安岡正篤先生だから根は保守的と言われるかもしれないが、政治的な意図はまったく意識しない、ましてや近年の自民党たるやはまったく相手にしない、安倍晋三は日本人の道德観念をズタズタにした張本人である、自民党はとっとと消えてしまえという思いである。よって根っからの無党派であると意識している、私は何かに執着し硬直することを最も恥じる者だ、一党一派にはまったく組せず、国会議員の言うことなどは嘘八百と指弾している。

5. TV 放映を見て

図-11 は、2024(R6)年7月15日（月）BS-TBS19時30分からの放送中の一コマである。「Z世代の若者にすれば“特定の政党を支持する人は偏った人”」という見方に、司会者は驚きの声を上げていた。私にすればそのように判断している若者はすごく健全な精神であると観る、それこそ今どきの若者はバランス感覚がすこぶる良い、まさに「中道正観」の観点であると大いに高評価を与えた。

驚きを露わにした司会者の見識こそが『老害』の何物でもないのだ。よく、与党自民党支持者の一定割合が野党に投票し、あるいは、野党支持者の一定割合が与党に投票したと言われるが当たり前の当然のこと、人間には元来、思想信条を限定化した色が付いていないのだ。気分でころころ変わる生き物なのだ。なのに俺は〇〇政党支持だとか、〇〇宗教の信

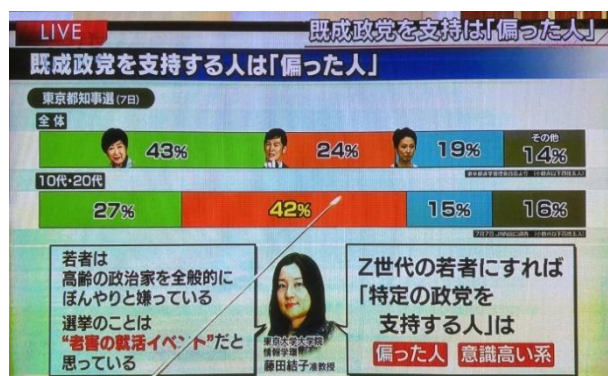


図-11

者だというのは、人格に傷が付き、洗脳され、どうにか為っているのだ……。『桎梏ア縫自野郎』（私の造語、自らを手かせ足かせ、自ら縫った袋に入り自由が取れない状態、ア縫は阿呆のこと、だが本人は意識出来ない。）に変質したもったいない人生である。

6. 私の敬慕・私淑する安岡正篤先生まさひろの言葉

先生はよく、天下は次の3種類の人間によって潰れると言っていたとのこと。

- | |
|--------------------------|
| ①邪見の小人（因果の道理を無視する誤った考え方） |
| ②無見の凡人（真理を突く見識が無いこと） |
| ③偏見の君子（偏って独善的な考え方） |

特に問題視すべきは③君子に多い偏見の性格であるという。普通感覚で考えれば、君子、すなわち敷衍的に言えば、身近なコミュニティにおけるあらゆる集団の何とか長を冠した者は権力の行使において独善的になりがち、ひいては思想信条が一部に偏って執着することは、集団組織を率いるものとして任に非ずということである。

立ち位置（人格）が客観的に前記図－7、G2の位置にある（地球上80億人が認知したもの）と思われた人ならば、「俺の信念は……」と発すれば拍手喝采だか、私の人生70余年の中で見るに付け、特に政治家や宗教家は前記G1の位置である、偏っているから胡散臭く詐欺師・ペテン師の臭いプンプンである。中でも何かに付けて“政治家も人間だ”などと居直る姿は醜いことこの上がない、諸悪の権化、卑怯者と罵りたくなる。後付けだが、石丸伸二氏の「恥を知れ、恥を！」である。そういう者に投票した選挙人に対しても「恥を知れ、恥を！」日頃どんな付き合いをしようとも、〇〇党に所属していても、選挙投票時は無記名投票なのだから良心に従い一票を投ずれば良いのだ。良心は卑怯者・詐欺師を絶対に嫌うのだ、これが生命なのだ、細胞の責任と義務なのだ。その良心・至良知に従順になればこそ生きがいを感じるもの、反抗すれば寂寥感が充満し残滓化し、深層無意識層に沈殿するだけだ、その残滓種子はブーメラン作用が大好きなので、その人にとっては何の利・理をも齎さない。政界や宗教界の党派・宗派は偏り・片寄りを象徴する集団である、こういう偏頗組織に没頭するようになると心の骨粗鬆症となるのは間違いない、だから万民が認めるように胡散臭く感じるようになるのだ。

そのような良心が作動しないとすれば、生んでくれた両親（細胞）に反抗した生き様であり、やがては天から自業自得・天罰のお灸を据えられるのだ。この言はオカルト・霊界の話では無い、最先端量子学研究から発展したパラレルワールド、あるいはZPF（ゼロ・ポイトン・フィールド）の見方において定説化しつつある科学と精神（宗教）の融合一致の見解を踏まえたものだ。

(end)